

意欲的に取り組むことができる体育授業の在り方に関する一考察 —大学生への体育に対する意識調査に着目して—

國安花菜子 (群馬大学)

I 問題と目的

保健体育科の目標には、「心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進すること」(中学校学習指導要領, 2017)が掲げられている。また、中教審(2005)は、体育は他の教科・科目ではできない身体運動を通しての「経験」ができる教科・科目である、としている。大築(2009)は、「よく鍛えられ、健康で活力ある身体は、豊かな知識や流暢な外国語と同様に、それ自体が一つの身に付いた教養である。」と述べ、体力およびそれらを養う体育の重要性を指摘している。しかしながら、体育は受験科目にないこと等により、それらの科目に比べ軽視されているというイメージがあり、中教審(2002)は、保護者をはじめとした国民の意識の中で、人を知識の量で評価しがちであったことにより、子どもの外遊びやスポーツの重要性を子どもの学力の状況に比べ軽視する傾向が進んだ、と述べている。

一方、近年の研究では、子どもの体力と学力に関連性があることが報告されている。新本ら(2016)は、体力測定項目間と学力測定項目間で多くの相関関係が認められたとしている。また、谷口ら(2010)は、体力に自信のある子どもたちは学習意欲が高く、子ども期における体力と学力には関連性が存在する可能性を示唆している。

このように、体育は心身の発育のみならず、学力向上においても有効な教科であると考えられる。よって、学習者に「体育が重要である」という意識を持たせ、意欲的に取り組ませる必要がある。

そこで本研究では、大学生への質問紙調査を実施し、体育授業に対する認識の実態を把握する。このことから、意欲的に取り組むことができる体育授業の在り方について考察することを目的とする。

II 研究方法

質問紙調査を実施した。

1. 調査対象

群馬大学の1年生及び教育学部保健体育専攻1~4年生

2. 期日

2018年12月

3. 調査内容

岡野ら(2003)の質問紙をもとに作成した全8問。

①体育はどのような教科か、②体育の目的、③体育授業の進められ方・行われ方、④授業中の教師の対応、⑤体育の時間数、⑥体育授業に意欲的に取り組むための条件、⑦体育における「学力」、⑧体育において必要な「学力」

4. 分析方法

質問項目ごとに、回答の人数を集計し、割合を算出した。各項目において、学部間、ポジティブ群・ネガティブ群の、体育に対する認識の比較を行った。

III 結果

群馬大学の1年生267名(教育学部47名、社会情報学部27名、理工学部120名、医学部73名)及び保健体育専攻の1~4年生56名から回答を得た。

尚、以下の図1及び図2は、各項目の「思う群」の割合を示したものである。

1. 学部間の比較

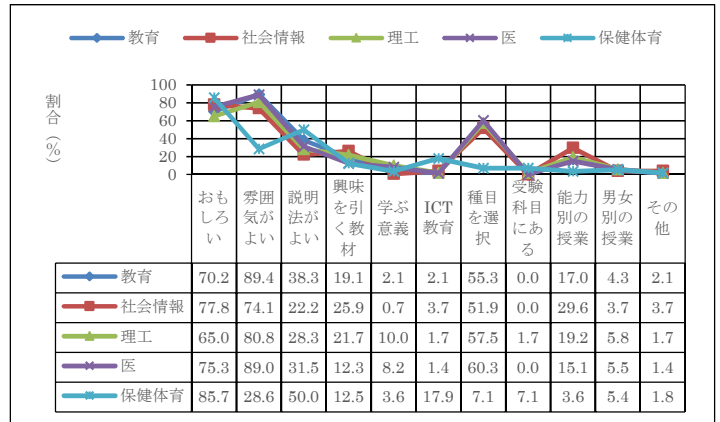


図1. 体育授業に意欲的に取り組むための条件

全ての学部において、「1.授業がおもしろい」を選択している者の割合が高かった。保健体育専攻以外の学部では、「2.雰囲気がよい」「7.種目を選択して行うことができる」を選択している者の割合が高かった。

2. ポジティブ群 - ネガティブ群の比較

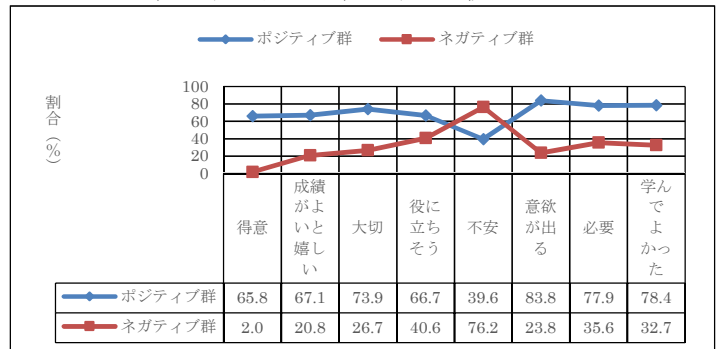


図2. 体育はどのような教科か(ポジティブ-ネガティブ)

「6.できるかできないか不安や心配になる教科」以外の全ての項目で、ポジティブ群はネガティブ群に比べ、「思う群」の割合が有意に高かった。

IV 結論

質問紙調査から、意欲的に取り組むことができる体育授業の在り方について、以下のように結論付けられた。

まず、学習者に体育の必要性や重要性を認識してもらうことが大切である。そのためには、体育の目的を理解させられるような授業を行っていく必要がある。具体的には、各単元のねらいや毎時間のめあてを明確にし、それらを学習者と共有することで、学習者が目標を持って授業に取り組めるようにすることが挙げられる。

次に、学習者が求めるようなおもしろい授業や雰囲気がよい授業を展開していく必要がある。そのためには、競争等のゲーム性のある課題、仲間と協力して取り組める活動を設定していくことが必要だと考えられる。また、仲間同士で励ましあったり教えあったりする雰囲気をづくり、教師が肯定的なフィードバックを行っていくことが必要だと考えられる。

V 主な引用・参考文献

大築立志(2009)「教養としてのスポーツ・運動—身体知—」 体育の科学第59巻 723-727